緑陰特別読物──"趣味がめざすものとは"

オーディオには一生をかけて取り組む価値がある

是枝　重治

ハイエンドの映像趣味の現状

オーディオもそうかもしれませんが，映像遊びも新しい試みはできにくくなりました．オーディオ以上にメーカーに依存せざるを得ないビジュアル遊びでは，新しいことはなかなかできないものです．

そんなことはないだろう，新製品のプロジェクタもテレビも映画音声用アンプも高画質DVDデコーダもたくさん出ているではないか，との声が聴こえてきそうですが，それはあくまで家電レベルの話です．

確かにそれはいちじるしく改善されました．2～30万円でもそれなりに鑑賞に耐えるプロジェクタは売られています．でも，高精細と表示されていても画素数が横1,280/縦720あたりでは，実はまったく駄目なのです．

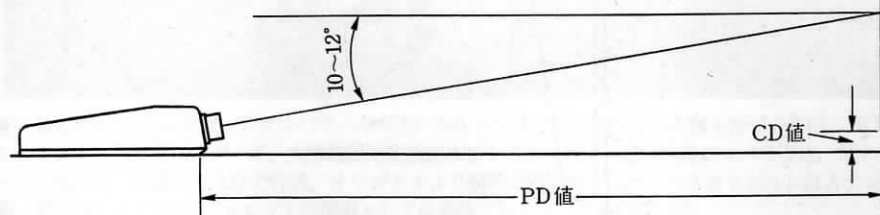
〈第2図〉真上から見ると，左右の赤と青はスクリーン中央に光軸を合わせるため，水平ティルト補正が常時必要

◀H氏邸の3管プロジェクタによるミラー反射システム

それは直視型のテレビでも同様で，ハイビジョンが映ることとハイビジョンの情報を全部表示できることは異なるのです．趣味としてのハイ・エンド映像では，少なくともハイビジョン映像が真に必要とする1,920×1,080の表示が全画面領域であらゆる条件下で満足できることが必要ですが，メーカーはそんなことは口が裂けてもいいません．

いまでもほんとうのHiFi画質は大型3管ビデオ・プロジェクタ/VPでしか得られませんが，その3管機がいよいよなくなってきました．世間一般での映像趣味はますます盛んになるでしょうが，ハイ・エンド映像趣味に適する機材はなくなりつつあるのです．──そう書いた先生にシャープがフルパネルの液晶テレビを出しました．さすがです．

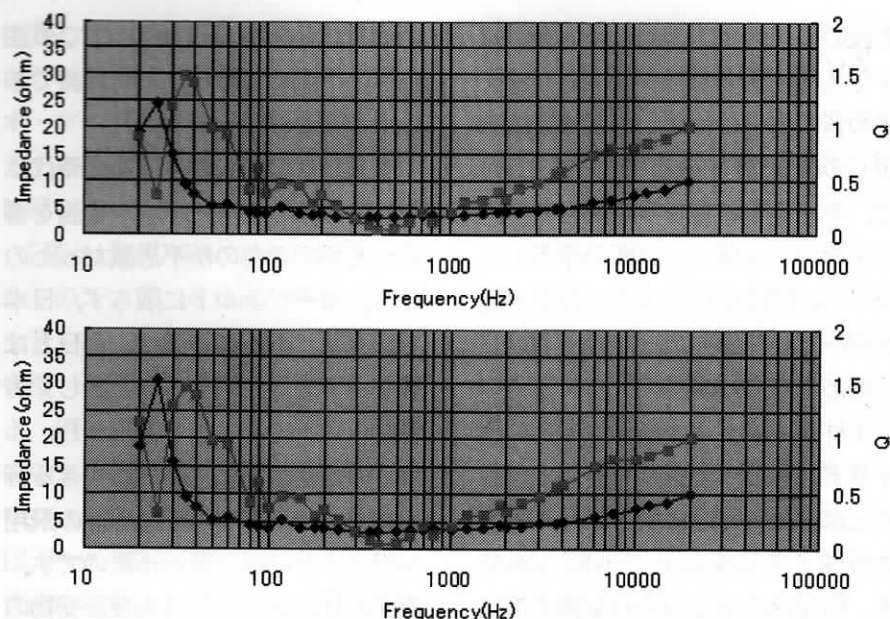
CRTが滅び行く昨今では，新しい3管機の出現は絶望ですが，機能的にいっても3管機でなければいけないことはまだあります．たとえば，球体に多数の画面をくまなく嵌めて，球面全体に1つの映像を投射する場合などは3管機でないと手も足

〈第1図〉スクリーンへの入射光はふつう10°前後傾いている

よく知られているように，スピーカを2本並べて鳴らすと3dB音圧が上昇します．仮に1Wのアンプで鳴らして1本で97dBの音圧が出たとしますと，2本で100dBになるわけです．ただその2本の並べかたが大事で，2本を近接して集中する場合でも，単に並べただけと，ある程度の角度を持たせるのとでは，相当異なるように思いました．

むかしジョーダンワッツのモジュール・ユニットを4本使用したシステムを実験したとき，縦でも横でも一列に並べると，2本並列使用と比較してさほど能率が上昇したとは感じられず，アテネータで1ノッチほど，つまりは2dB程度であろうかと思いました．2本と4本では理論上は+3dBですから，まあそんなものでしょう．

AXIOM 80の2本並列は，縦でも横でも，さらには角度つき横並列もすべて試していますが，指定箱の角度付き横並びがいちばん鳴りっぷりはよかったようです．スピーカが具合よく接近するので，相互放射インピーダンス効果がよく働いて，そうなるのかとも感じました．指定箱の角度付き2本横並びと比べると，普通の縦2本並列は2dBほど低いような感じがしました．まあ，これはあくまで印象ですし，部屋でも変わるでしょう．

さて今回，4本を指定どおりの角度を付けて指定どおりに集中配置したところ，その効率のよさには腰を抜かすほど仰天しました．正確な比較ではありませんが，アテネータで5〜6ノッチほど絞らないと，1本とおなじになりません．効率にして10〜12dBも上がったようです．

スピーカのこのあたりの理屈はよくわからないのですが，4本を近接して，あたかも1点から出たように

●上が定電圧，下が定電流駆動時の特性．測定は沢見英男氏（本誌筆者）．氏のHPは一度ご覧になることをお勧めします．測定条件もそこにしるされています．◆がインピーダンス，■がQ特性．
スピーカの挙動の多くはインピーダンス特性からわかるが，4本システムでは高域の上昇は少なく，低域の山は1つで，Q特性も非常に滑らかで，他に類を見ない．測定は私の店なので無響室ではない．

集中配置したときは放射インピーダンス以外の作用が働くのでしょうか．箱鳴りの問題やアンプの特性も関係するわけですが，不思議なことです．カエデの12mm薄板で作りましたから，確かに箱は鳴ります．でも2本では高域が明らかに減衰して聴こえますが，4本使用では1本のときよりもさらに延びて聴こえますので，箱鳴りでは説明がつきにくいのです．

理論とはぜんぜん合いませんが，12dB上昇だとすると，このスピーカ・システムの効率は110dB程度になります．WE-555に段ボールで大きなメガホンを作って仮に付けたシステムと，効率はさほど変わりませんし，極めて明解な音はまったく不思議というほかなく，納得できる理由は思いあたりません．

オーディオ・マニアからみた青山二郎の電蓄と小林秀雄の「モオツアルト」

2003年は小林秀雄生誕100年で，さまざまな書物が出ました．昔から思い出したようには読んでいましたが，50歳を過ぎて読むと，以前とは受け止めかたがまったく異なることに気がつきました．どうしてでしょうか．小林は常に現代を語っているように思えてなりません．

最近になって新潮社から小林秀雄のさまざまな講演を入れたCDが出ています．かつて鎌倉の華正楼で五味康祐が聞き手となった音楽談義があり，雑誌『ステレオサウンド』創刊まもない第2号で，それが巻頭を飾ったことがありました．1987年になってステレオサウンド社からそれがカセットで刊行され，そして今回の新潮社版は五味さん抜きですが，CDとなって店頭に並んでいます．でも，五味抜きの構成はおもしろくありません．あの五味の小林に対する畏敬と恭順の態度には単に文壇での立場を超えたものがあり，尽きせぬ興味が湧くものです．

知の巨人，小林秀雄の主たる業績や足跡は私には理解の範囲外ですが，美術論/音楽論に限っては喰い付くことが何とか可能です．オーディオ論は昭和33年に書いた『蓄音機』などがそれに相当します．これはそ

の後のオーディオ評論に多大な影響を与えた節がありますし，30サイクルの音の再生に執着した五味康祐を親しみと愛情を込めて揶揄していて，たいそうおもしろい読物です．蛇足ながら「柳生十兵衛の作者のところへ，柳生十兵衛みたいな男が現れ……」との個所での“みたいな男”とはあのTさんでしょう．

小林がオーディオに対して長いキャリアと恐るべき慧眼を有していることは，『蓄音機』に限らず，その後の五味との音楽談義でも明らかです．俯瞰的立場での核心を突く卓見は瀬川，五味といえどもとても及びません．すでに『蓄音機』で小林はハイファイ・オーディオ趣味の隆盛と，その帰結としての滅亡に至るプロセスを明解に予言しているのですから．

小林の装置について思うこと

昨年に出た白州信哉(編)の本に小林の最後のころのステレオ装置が載っていて，さすがと思ったものです．それは以下の構成でした．スピーカは不明ですが，アンプはQUAD 22＋QUAD II，ターンテーブル/ガラード301，カートリッジ/オルトフォン旧型，アーム/たぶん旧型EMTであり，それがさり気なく組み合わさって置かれていました．

小林の名著にご存じの『モオツアルト』がありますが，それを書き始めたのは太平洋戦争が始まったころです．戦争中を通して折々書いて，戦後間もなく上梓されたのです．1つのまとまった形にはなっていますが，それぞれの時期のそれぞれの思いが複雑にからみ合っています．あれを読むと，小林は理性や理屈で音楽を聴いていたのではなく，みずからの感性を研ぎ澄まし，時に飛躍させて聴いていたのではと思います．新潮社の以前の新訂第8巻での江藤淳の指摘のとおり，これは詩であって音楽なのでしょう．

でも私はむかしから，あの時代になぜあのようなモーツァルト論を書くことができたのか不思議だったのです．モーツァルトに限らず，日本で演奏される西洋音楽は，今日とは異なって想像を絶するほど乏しく劣悪なレベルであったであろうし，ふつうの蓄音機で聴くことができる音の範囲では，あのような感性の飛翔ができるとは信じ難かったのです．要するに，わたくしは古びた安物の蓄音機で「モーツァルトのポリフォニイが威嚇するように」鳴るかどうかを疑っていたのでした．

すでにお読みになられたかたも多々おられると思いますが，その疑問に対する解答は白州正子の『いまなぜ青山二郎なのか』(新潮文庫)という本で得られます．そこにはこう記されています．

――林秀雄の『青山二郎略年譜』によると，昭和17年41歳，5月，小林秀雄，青山宅でモオツアルトをきき感動としてあるが，その青山宅がどこであったか不明である．(中略)その頃彼は音楽に凝っており，ステレオが発明されるずっと以前に，高音と低音の蓄音機を部屋に置き，拡声器を何ケ所かに据えて終日聞き惚れていたというのは有名な話である．小林さんが『モオツアルト』を書いたのはそれから4年後のことであるが，本質的なところでジイちゃんとは，深く関わっていたのである．――

『モオツアルト』を書く直接の切っ掛けとなったその出来事は冬の道頓堀にあったのではなく，昭和17年5月のある友人宅の蓄音機の音にあったことは明らかですが，それがどの友人のどんな装置かまったくもって不明でありました．

●小林秀雄著『ゴッホ』

でも『今なぜ青山二郎なのか』を読むと，小林がモーツァルトを聴いて感動した装置は青山のものだとわかります．それが比類なき美意識をもって知られる希代の好事家で，小林にとっても骨董道の大先達である青山二郎が一時期熱中したハイファイ電蓄システムであれば相応の音を出していたに相違なく，“決して正確な音を出したがらぬ古びた安物の蓄音機”でその感動を得たのではないことがわかります．

私にとってこれはたいへん大事なことで，これを読んで積年に渡る謎がまたひとつ解けた思いになりました．白州の言では青山の電蓄のことは有名な話だそうですが，迂闊なことにそれまでぜんぜん知りませんでした．これを読んでわたくしは飛び上がるほどびっくりしたものですが，驚く方がやはり不勉強なのでしょう．

白州正子の文章は，技術の枝葉に疎い女性の書いたものですから，装置の正確な表現には欠けていますが，要するに青山は昭和17年にはマルチウェイのスピーカを，ステレ

オ装置のごとく部屋のあちこちに並べて聴いていたのでしょう．または各部屋にスピーカを置いて，そこまで線を延ばしていたかもしれません．でも当時は4分勝負のSP盤ですからその可能性はないと私は思います．スピーカをたくさん並べていただけなのかも知れませんが，ステレオの発明される以前という表現を素直に受け取ると，それらをいっぺんに鳴らしていたと思われます．

30年前には高橋悠治の『モオツアルト』批判があり，彼は“愛情を持った批判者”とはいえませんが，それなりに傾聴すべき点はあります．でもこれを含めて知る限りでは，後世の論評には青山の電蓄の存在は出ていないようです．ぜんぜん気が付かなかったのか，知っていてもいかに大事なことかがわからないので無視したのか，そのいずれかです．

昨年出版された河出書房新社の小林特集本にはこれらの視点を欠いた『モオツアルト』批判がありました．私は『モオツアルト』『ゴッホの手紙』の序文，『蓄音機』の3部作は，それこそ三位一体をなすものと思いますが，その筆者は，引用した文献の初出に関する記述から重要な『ゴッホの手紙』は読んでいない可能性がある，と思いました．むろん小林の絵画や骨董趣味に与えた青山の極めて大きな影響は一顧だにされていないようでした．総じて音楽の視点からの小林批判では，表裏一体であるはずの近代絵画論はすっぽり抜け落ちていて，近視眼的な浅さが気になります．

『モオツアルト』をオーディオ的に読むと，“疾走する悲しみ”ではなく“威嚇するポリフォニイ”こそ重要であることがわかります．「海が黒くなり，空が茜色に染まる」ようには鳴らないからこそ小林はそう表現し，挑発したのではありませんか．そんなことを重大視するのはオーディオ・マニアだけさ，という声がきこえてきそうですが，わたくしはそうは思いません．

「僅かばかりのレコオドに僅かばかりのスコア，それに，決して正確な音を出したがらぬ古びた安物の蓄音機——何を不服を言うことがあろう．例えば海が黒くなり，空が茜色に染まるごとに，モオツアルトのポリフォニイが威嚇する様に鳴るならば．」…… 昭和17年5月のある朝，青山の電蓄はまさしくそう鳴ったのではありませんか．

そのとき実際に小林が眼にしていたのも，吹き荒ぶ風，無気味な空，荒れ狂う波だったかも知れません．でも，その天変の光景に拮抗するに足る音を青山のスーパー電蓄が鳴らしていたのも，また事実でありましょう．

モーツァルトの音楽を抉る衝撃的なその音は，天啓として長く小林の脳味噌に残り，昭和21年5月の母の死の悲しさと同調し，それを遡る20年前の過去の音楽的記憶と同期して疾走したのではありませんか．疾走したのはモーツァルトの音楽であり，小林の記憶でもあったわけで，あの朝の劇的なシチュエーションでの青山の電蓄の鮮列な音の記憶が触媒になったはずです．

五味との音楽談義で発した「蓄音機の音もたった1回の歴史的事件だ」との言葉も，青山の電蓄を踏まえると，いいようのない重みがあるものです．すごい一言です．

適中している小林の予言

戦前の雑誌を見ると，ことアンプに関する限り，45や2A3や50がロフチン回路やトランス結合，さらには凝ったCR結合で使われていて，いまとなんら変わるところはありません．私はむろん戦後生まれですが，戦前になかったものはケータイとデジカメくらいで，大画面のビデオ・プロジェクタも1943年にはすでにありました．でもマルチウェイのスピーカを多数個分散配置で鳴らしていたとすれば驚きで，文献で知る限りの天才，青山でしたらあり得ない話ではありません．太平洋戦争が始まったころに「低音や高音の拡声器を何ケ所かに置いた装置」といえば今様にいえば超ハイエンド・システムであるでしょう．

生そのままに鳴るといういまの機械ならともかく，戦前のSP装置で音楽の本質などわかるか，という人もいるでしょう．オーディオに無縁の人はそう思っていても不思議ではありません．でも，論より証拠，21世紀の今日，一部の超マニアは大金を投じて大戦前の装置に回帰し大戦前のレコードを求めているではありませんか．

小林は46年前にこうも書いています．「それよりも，そういうレコードファンの天国を，はっきりと思い描き，そうなればどう言うことになるかを考えてみた方がよい．私達は，元の黙阿彌になるだろう．歴史と言うものを全滅させたハイファイ・システムを前にして，私達は，何処で歴史を取り戻すのかがはっきりするであろう」と．

その予言は恐しいまでに見事に適中しているのですが，なってしまったものは仕方ありません．歴史の歯車はどうにもできないものです．でも，あの『モオツアルト』が1台の電蓄の音の啓示によってもたらされたものとしたら，やはりオーディオには一生をかけて取り組む価値がある，というべきです．